

第三章 町並保存の問題点

第一節 高山町家・町並の特徴

1 町家の特徴

町家の外観 高山の町並は道路に面してたちならぶ町家群を主要な構成要素としている。町家はすべて「木」を主材料として作られており、木の文化の所産である。^{*1} 構造材・造作等が木であるのはもちろんのこと、正面の壁面・庇・屋根もみな木が主材料である。

高山町家の外観の形式上の特徴として、次のような点があげられる。まず屋根勾配がきわめてゆるく、軒の出がひじょうに深いことである。屋根勾配は2寸7,8分ほどで3寸に満たない。この勾配は板葺で可能なもっともゆるいものであろう。軒の出は1.2mほどである。軒の出が深いので、道路におおいかぶさってくるように感じる。多くの家は二階建あるいは屋根裏部屋をもつ中二階建^{*2}で、腰に小庇をつける。この小庇は高山独特の形式で、すべて木でつくられており、出は小さく、大屋根の内側でおさまっている。小庇の高さは各家ではほぼそろっているので、連続すると水平線が強調され、町並に統一感をあたえる。次に一階の壁面は大部分が建具あるいは格子である。格子は棧の割付け方などによって3種類に分けられる。そのうち最も特徴があるのは、比較的細い棧を縦だけに疎に配したものと、これにやはり比較的細い棧を横に疎に配したものである。すなわち棧の疎な方形の格子である。格子にはこのほか千本格子のように密に縦棧を配したものがある。ただ奈良等の町家や農家にみられるような太い棧を用いた格子はない。現在では格子を用いている家が多いが、柱にのこる古い仕口などを調べると、かつてはシトミが入っていた家が多い。ここでいうシトミとは柱間に兩戸のような板戸を横にして、柱にほってある溝にしたがって落し込むもので、板戸は多くの場合3枚である。これを開くときは上にすりあげ、内法上に収納する。格子の内側にシトミを用いている家も多いが、格子がなくシトミだけの家もあり、特に「こみせ」の前面はシトミだけである。格子の内側にはスダレをたらしめている家も多い。天保14年の「建家造作建具絵図面小前帳」に「打付すだれ」とあるのはこのスダレをいっているのであろう。内側に障子をたてている家も多い。現在ではガラス戸が多くなっている。次に二階の壁面をみると柱間全体にわたって開口部をつくり、格子を入れ、内側に障子をたてるのが普通である。この二階の格子は縦棧だけで横棧はないものが多い。また障子だけで格子のない家もある。

以上のように外観は木を主体として構成されており、少しある



3-1 木曾 奈良井宿の町並



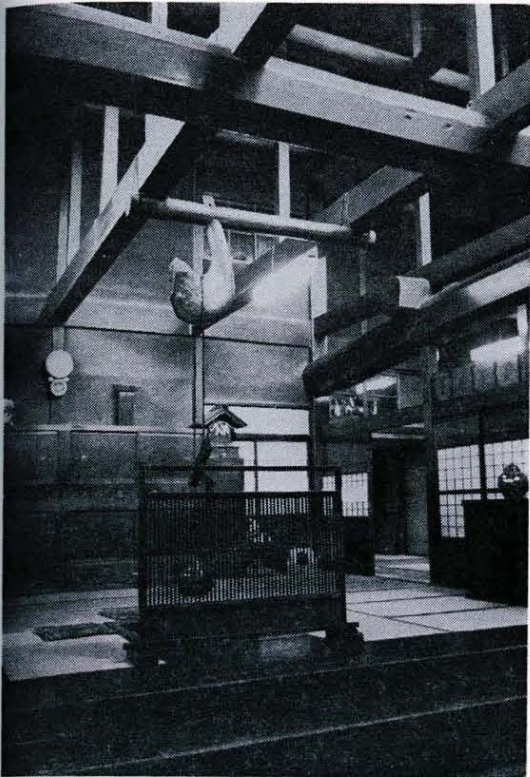
3-2 会津 大内宿の町並



3-3 大和 今井町の町並

*1 町家を材料・外観・テクスチャーによって分類すると次の三種類が考えられる。

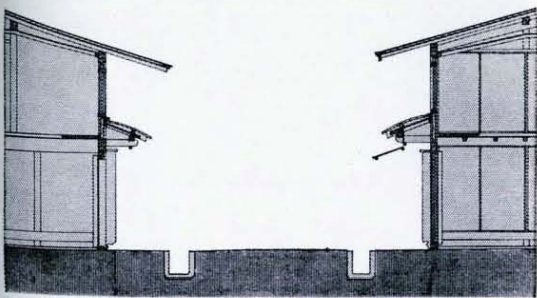
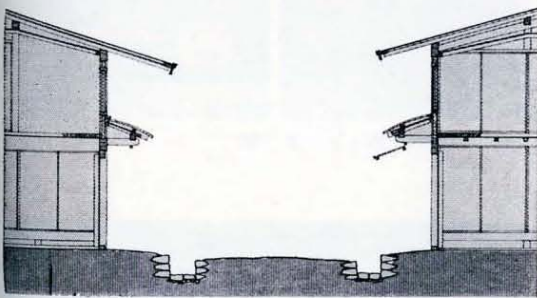
- 1 屋根・壁面とも木を主材料としている——高山・木曾など中部日本に分布
- 2 土壁の真壁、草ぶき屋根——主に東日本に分布
- 3 土壁の大壁、瓦ぶき——主に西日本に分布



3-4 高山の町家内部

* 2 高山町家の屋根はもと板葺石置屋根であった。現在はほとんど全部が鉄板葺にかわっているが、勾配がゆるいので道路からは屋根面が見えず、屋根が鉄板葺にかわったことが外観に与える影響は少ない。

* 3 木曾路の街道にたちならぶ町家は高山町家と同様に木を主材料とするが、二階建、中二階建の場合、二階部分を前面にせりだすのが一般的である。



3-5 恵比須台組 道路と町家の関係
(上 復原、下 現状)

土壁はアクセントの役割を果たしている。

町家の内部 次に家のなかに入ってみよう。内部は3部分にわけて考えることができる。表通りに面した「みせ」部分、「おえ」を中心とした中央部、奥の裏側部分である。「みせ」部分は二階の床がそのまま一階の天井となっているので、根太天井で、その高さは低く、やや圧迫感のある空間である。次の「おえ」は「みせ」部分とは逆に天井がなく、吹抜で高い解放的な空間となる。主要な梁が比較的低い位置を縦横に走っている。この吹抜部分のデザインは、高山の町家の特徴をもっともよくあらわしている。吹抜は「だいどころ」の一部にも及ぶ。規模の大きい家では「おえ」と隣りあわせて部屋(かずきなど)をとる。ここは吹抜としない。次の裏側部分は家族の部屋と座敷がとられる。二階があるので天井は高くない。小規模な家では接客座敷をこの裏側部分の二階につくこともある。

「おえ」の吹抜け部分に高山町家の特徴がみられるのだが、この吹抜はごく最近に建てられた家を除いてすべての家にみられる。ここを吹抜とした理由は、間口が狭く、奥行の深い家が隣と接して建っているため、中央部には外に面しない暗い室ができるので、吹抜にすることによって天窗や上部の側面から採光するためである。また「だいどころ」上部の吹抜は、ここにイロリがあるから煙を抜くためでもある。これに加えて吹抜の大きな役目はデザイン上の効果である。縦横に組まれた梁組は、板葺屋根の民家である高山町家の魅力をいかんなく発揮している。「おえ」上部で縦横に組んだ梁組を見せる構法とデザインは、富山・新潟県などの農家にも一般的にみられるもので、この点は農家と共通している。ただ高山の町家では主要な梁が比較的低い位置に配してあるのにくらべ、富山・新潟県のもは高い位置にのみ配してある。

高山町家の規模をみると、間口2.5間から3.5間のものが多いが、間口が9間、10間以上の大規模な家も多いことが注目される。これらは高山における建築文化を支えてきた上層のものの家であり、禁令にふれる造作が多く用いられていたことは、さきにあげた天保14年の小前帳の記載によっても明らかである。

2 町並の分析

恵比須台組町並の特徴 前項で町家の特徴をのべたが、このような町家が道路の両側に連続してたちならび町並をつくっている。ここで、町並の景観を特徴づける要素を分析し、恵比須台組の町並がどのような特徴をもつか調べてみよう。○印は恵比須台組町並にあてはまることを示す。また末尾に簡単な説明を加えたものもある。

道路に関する事柄

幅員——広い 狭い ○中間、幅員は両側溝をふくめて4 m

勾配——強い 弱い ○ほとんどない
 直・曲——○直線 わずかな曲線 強い曲り
 交叉——多い ○少い
 舗装——石敷 バラス敷 コンクリート
 ○アスファルト(もとははバラス敷)
 水路——○両側 片側 中央幅広い ○狭い
 樹木——あり ○なし

町家に関する事項

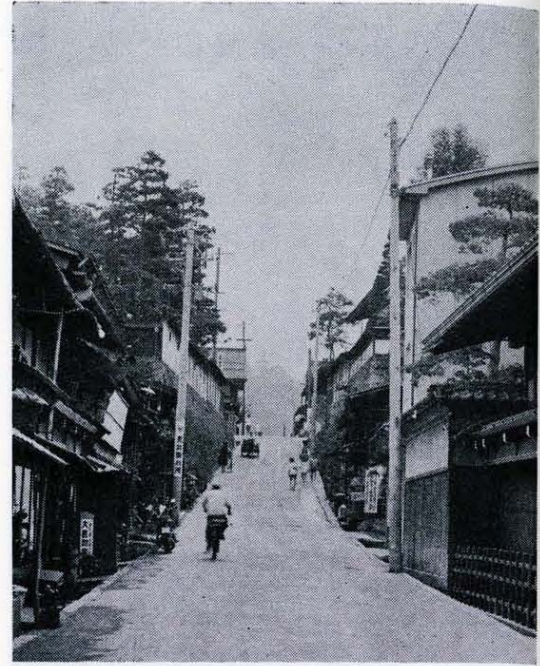
構造——○木造 練瓦造 モルタル R.Cその他
 平入・妻入——○平入 妻入 両者まじる
 階数——平家 ○中二階 ○二階 三階以上
 屋根——○切妻造 入母屋造 寄棟造
 軒の出——○深い 浅い 中間
 軒高——高い 低い ○中間
 間口——広い家が多い 狭い家が多い ○両者まじる
 正面——○建具・格子を主とする 壁面が多い
 ○二階の壁面がそろろう 一階が前面に出る 二階が
 前面に出る
 庇 ——大きい ○小さい
 色彩——○木肌 ○黒色 その他
 年代——○江戸時代 ○明治・大正・昭和

道路と町家の関係

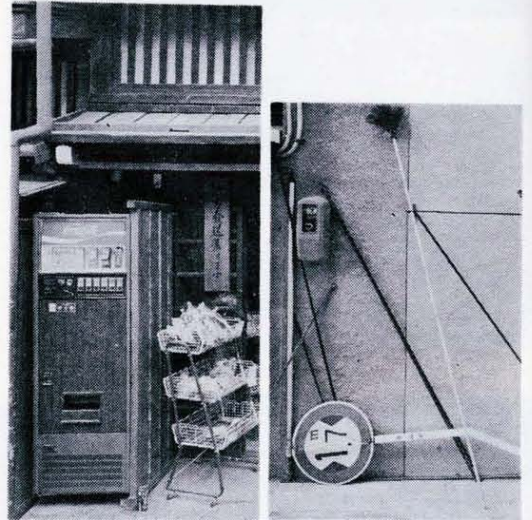
道路幅と町家の軒高との関係——道路幅が狭く圧迫感がある
 道路が広く散漫 ○普通
 道路に面する町家——○密に建つ 密でない
 町家の前面——一直線上にそろろう ○多少の出入がある
 建物の種類——○主屋が主 倉・塀・その他の建物が多い 生
 垣など多い

町並に関する事項、その他

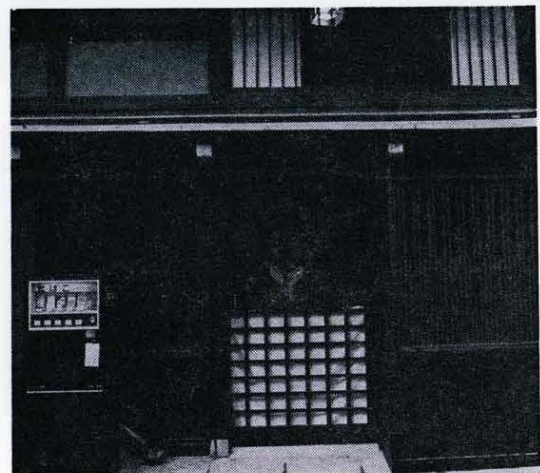
デザインの統一性——○あり なし
 デザインの強弱—— ○強い 弱い
 視点となる物—— ○あり なし
 同時代の建物の集中度——○あり なし(江戸末から明治のもの
 が多い)
 異質あるいは目ざわりな物——多い ○少い
 商家・シモタヤ——○商家が多い シモタヤが多い(現在は観
 光関係の商店が多い)
 町を通る人車——○観光客が多い(観光客の車の通過を規制)
 看板・ゴミ箱、各種メーター類・郵便受けなど——目だつ
 ○目立たない(目立たないような工夫がみられる)



3-6 坂道と町並(高山えび坂付近)



3-7 自動販売機とメーター類



3-8 黒く塗った自動販売機



3-9 車の進入

電柱・交通標識などのあつかい——電柱は撤去、交通標識は町の両端にある。

町並の構成要素およびデザインの分析をしたが、高山の町並、特に恵比須台組の町並の最も特徴とするところは、幕末以降明治時代にいたる間に建てられた町家が集中し、これらの町家が同様式によっており、そこに統一性があることにある。

町並の構成要素およびデザインの分析をしたが、このような項目にしたがって高山の町並を分析すると、ひとくちに高山の町並といっても、そこには共通点が多く見出される一方、町並・町筋によって多少の相違がある。たとえば軒高をみると、恵比須台組では3.3~4mが56%をしめているのに対し、隣りの上二之町では3.3~4mは37%で、4m以上のものが50%以上をしめている。また中二階建と本二階建の分布(図版4)をみると、恵比須台組では中二階建が多いのに対し、片原町では本二階建のほうが多い。このように一、二の点を比較しても、町並・町筋による特徴があるから、町並保存にあたってはそれぞれの特徴をつかみ、計画をたてなければならない。恵比須台組をとりあげてみると、ここでは江戸時代末期から明治時代にいたる間に建てられた町家が集中し、同様式による家がそろっており、そこに統一性があることにもっとも大きな特徴を見出せるのである。軒高が低い家が多いので、ここに本二階建など軒高の高い家を建てた場合には著しく目立つことになる。これに対し、本二階建の多い片原町などでは、新築する家が二階建であっても、そのデザインいかんによっては、現状の町並景観を著しくこわすことはないであろう。町並・町筋ごとにきめこまかい検討が必要である。

第二節 町並保存の理念と現実

1 町並保存の理念

新しい町づくり 町並保存は、保存することが第一に求められるが、その保存とはただ単に現状のままを凍結することではない。長い年月にわたって蓄積され、歴史的評価にたえてきた遺産——物質・技術・精神的なものをふくめた遺産を正しく伝承し、発展させるという、町づくりのひとつの方法である。そこは人々の生活の場であるから、なにを伝承し、なにを発展させるかがもっとも重要な問題である。町並保存は人間的スケールで地域に根ざした都市をつくることを根本的な思想としているから、町並を構成する物的要素の保存を基本として、それを動かす人々、それを形成してきた歴史的